News Letter vol.19

Japanese Society for Dance Research

17号よりニューズレターが変わりました！！

目 次

1. 第73回大会のご案内･･･ 実行委員長･事務局 :塚本順子理事

2. 海外の舞踊学関連学会および国際共同研究の動向
2-1. 巻頭インタビュー（国際共同研究の動向）
「ダンスドラマトゥルクの活動と国際ネットワークの構築」
中島那奈子（ダンス研究･ダンスドラマトゥルク ）
聞き手：波照間永子（明治大学）

2-2. 国際学会情報（舞踊学･演劇学･パフォーマンス研究）
①台灣舞蹈研究學會 （台湾）
林亞婷(國立臺北藝術大學･台灣舞蹈研究學會監事)
聞き手：富燦霞（明治大学）

② The Natya Kala Conference (India) 竹村嘉晃（国立民族学博物館南アジア研究拠点）
③ A Associação Nacional de Pesquisadores em Dança (Brazil) 神戸周（東京学芸大学）
④ European Association for Japanese Studies 稲田奈緒美（桜美林大学）

3. 私にとっての在外研究
3-1. トラディショナルとコンテンポラリーのあいだ 岩澤孝子（北海道教育大学）
3-2. ピナ･バウシュとヴッパタール大学 貫成人（専修大学）

4. 委員会より
4-1. 学会誌編集委員会･･･森立子
4-2. 2021年度学会大会･･･塚本順子
4-3. 例会企画運営委員会･･･八木ありさ
4-4. 研究奨励賞選考委員会･･･柴眞理子
4-5. HP管理委員会･･･杉山千鶴
4-6. 学術会議関連･･･貫成人･杉山千鶴
4-7. ニューズレター委員会･･･波照間永子

5. 書籍紹介

6. 事務局だより
編集後記 奥付

1. 第73回大会のご案内

第73回舞踊学会大会のご案内

第73回舞踊学会大会実行委員長　塚本順子

第73回舞踊学会大会は、新型コロナ感染症の状況を考えオンライン開催に変更となりました。今年の大会テーマは「身体性の回復を求めて―舞踊・演劇の再考―」です。22名の方々による舞踊に関する多様な主題の一般研究発表に加え、2019年度研究奨励賞を受賞されました齋藤尚大氏の受賞特別講演「変容的抽象とラディカルな感情移入―ルドルフ・フォン・ラバンに対する病跡学的アプローチ」がございます。さらには、基調講演として、総合地球環境研究所の山極壽一先生には「身体の共鳴と共感能力の進化」というタイトルで、コロナ後の人間社会の構築に不可欠である身体性についてご講演いただきます。また、シンポジウムとして「地域社会・教育現場におけるダンス・演劇のいま、そしてこれから」では、コロナ感染症がもたらした社会的な変化によって、地域社会や教育現場における舞踊や演劇がどのように実践され、さらに今後、いかにつなげていくのかについて、多角的な視点でご討議いただきます。

舞踊学会の会員の皆様はもちろんのこと、多くの方々に関心を持っていただけるテーマかと存じます。なお、大会の詳細なプログラムや一般究発表の抄録、基調講演・シンポジウム「概要」は事前にHPに掲載いたします。ご自身でダウンロードし、プリントアウトしていただけますようお願いいたします。参加費は、一般会員および学生の方々は無料です。一般非会員の方々は1000円となります。

但し、参加されるすべての方に、手続きが必要です。12月4日（土）9時まで受け付けておりますので、舞踊学会HPにてお手続きをお願いいたします。

有意義な大会となりますよう、多くの皆様方のご参加をお待ちいたしております。

記

1. 日時：2021年 12月 4日（土）

2. 内容：
一般研究発表

2019年度研究奨励賞　受賞特別講演
「変容的抽象とラディカルな感情移入―ルドルフ・フォン・ラバンに対する病跡学的アプローチ」
齋藤尚大（横浜カメリアホスピタル）

基調講演
「身体の共鳴と共感能力の進化」　山極壽一（総合地球環境学研究所　所長）

シンポジウム
「地域社会・教育現場におけるダンス・演劇のいま、そしてこれから」
コーディネーター　貫　成人（専修大学）
パネリスト　阪本洋三（近畿大学）
谷竜一（京都芸術センター）
黒須育海（ブッシュマン主宰）

以上

2. 海外の舞踊学関連学会の紹介

2-1. 巻頭インタビュー

「ダンスドラマトゥルクの活動と国際ネットワークの構築」

中島那奈子（ダンス研究・ダンスドラマトゥルク）
聞き手：波照間永子（明治大学）

©TAIFUN

Q1. この度はインタビューをお引き受けくださり感謝申し上げます。中島先生には舞踊学会ニューズレター17号・18号ともに、アメリカやドイツの貴重な学会情報をご執筆いただきました。海外の多くの研究者や実演家と交流していらっしゃるご様子、大変すばらしいと思います。まずは中島先生が留学を志した理由、そして留学中の経緯についてお教え願います。

ご質問をありがとうございます。どうぞよろしくお願いいたします。学生の時は、演劇学を学びながら、この領域で日本の舞踊を論じる限界を感じていました。留学をした経緯は、パフォーマンス・スタディーズという分野に興味を持ったからです。米国ニューヨーク大学のティッシュ・スクール・オブ・ジ・アーツのパフォーマンス・スタディーズ学科に留学したのですが、ここでは理論と実践の往還を謳っているため、ラーサボックスという演技術や様々な身体ワークショップが授業のカリキュラムに入っていて、予想以上にアートスクール的な環境に、はじめは驚きました。ただ、ここで出会った人々は、才気溢れるアーティストでかつ優秀な研究者という方ばかりで、多くの刺激を受けました。修士論文で、ジャドソン教会派のイヴォンヌ・レイナーにおける芸術的な変遷について執筆したことが、今の「老いと踊り」の研究に繋がっています。また、受講していたアンドレ・レペッキ教授による「ドラマトゥルギー」の授業で、初めてダンスドラマトゥルクの仕事を始めたのですが、その仕事がうまく運び、次々にNYダウンタウンダンスでの仕事へと、繋がっていきました。ただ、現場の仕事がうまく運ぶようになると、まとまった時間を取ることが難しくなり、それにつれて、自分の研究をまとめたいという気持ちが強くなっていきました。その時に、ダンスドラマトゥルクの仕事もダンス研究も双方実現できる場所として、ベルリンという都市が候補にあがってきました。ヨーロッパでは、すでにダンスの分野で多くのドラマトゥルクが活躍していたため、そういったドラマトゥルク達にNYで話を聞いていた経緯もありました。その後、数ヶ月のヨーロッパでの放浪を経て、ドイツベルリン自由大学で、初めて舞踊学という分野を立ち上げたガブリエレ・ブラントシュテッター教授による受け入れが決まり、また、タンツプランという大規模なダンスプロジェクトが始まることを聞いて、ベルリンに行くことを決心しました。

NYジャパン・ソサエティでの公演を終えた翌々日に、まずは語学研修先のドイツ・ライプチヒに飛びました。ドイツ語の研修をここで4ヶ月間徹底して受けましたが、ここでは日常生活でもドイツ語以外は一切話せない厳しさで、語学試験のために、病気になる学生も出るほどでした。大学院に入って、ダンスの話をできるようになったとはいえ、それから先の数年間は、慣れないドイツ語との闘いでした。周りに認められるのも、博士論文を書き上げるのも並大抵の努力ではうまくいかず、ドイツの大学の厳しさに、何度も躓けそうになりました。最後は、図書館に数ヶ月籠って論文を仕上げましたが、知人と5分以上立ち話ができないほど、自分を追い込んでいました。論文の内容はもちろん、博士論文提出規定や論文公開審査をパスし、学位を取得することは、こんなに大変なのだと改めて感じました。

2. 海外の舞踊学関連学会の紹介

Q2. プロフィールを拝見すると、日本舞踊の師範でいらっしゃるとのこと、日本舞踊は幼い頃から親しまれていたのでしょうか？日本舞踊の経験が博士論文のテーマに繋がったのでしょうか？

日本舞踊は3歳から始めました。私自身は舞踊の家に生まれた訳ではないのですが、母方が芸好きの家系だったので、幼い私を稽古場に通わせてくれたようです。ただ、若く踊りを始めたので年期だけは長く、若い時分から年長の方に、踊りやしきたりを教える立場になってしまいました。ただ、他流なのですが故・花柳寿南海さんの素踊りに感動して、若いと踊れない踊りがあることに不甲斐なさも感じていました。当時私は、日本舞踊だけでなく、舞台芸術全般に興味があったため、学生歌舞伎や学生能も行っていましたし、バレエやダンスも演劇同様大好きで、秘密裏に習ったり、舞台を見に行ったりしていました。博士論文で扱う素材は、すでにほぼこの時に揃っていたのですが、「老いと踊り」という視点は、そうした日本の舞台芸術と、留学先の米国・NYやドイツ・ベルリンの、若さを尊ぶダンス文化が、衝突した時に生まれたと考えています。

Q3. 日本学術振興会のポスドク時代は、埼玉大学とベルリン自由大学に拠点を置いて、インターウィービング・パフォーマンス・カルチャーズのフェローとして研究なさったとありますが、どのようなご研究をなさったのでしょうか？

ここでは、博士論文での「老いと踊り」というテーマを発展させ、「子ども」という視点を取り入れていました。＜老い／加齢＞を論じていたら、結局、人間はいつから老いるのか、わからなくなってしまったのです。というのも、年齢による区切りは、暦の切り替えや歳の数え方をみても恣意的で、また、若く幼いという知覚にも、様々な文化的バイアスがかかっています。近代以後の社会に貢献する成人の規範を、子どもという変数を加えて、もう一度問い直すものでした。

ベルリン自由大学の国際研究センター「インターウィービング・パフォーマンス・カルチャーズ」のフェローとして所属していた時には、書籍や論文で名前を知っていたスター研究者とアーティストが各国から集まってきて、ベルリンに滞在しながら研究を行っていました。ここでは2008年から、演劇学のエリカ・フィッシャー＝リヒテ教授と舞踊学のガブリエレ・ブラントシュテッター教授を筆頭に、大掛かりな国際研究プロジェクトが立ち上がっていました。ドイツ学術界の国際ネットワークを駆使し、通常は多忙でコンタクトさえ取れない研究者やアーティストたちを招聘していました。インターカルチュアリズムの新しい形「インターウィーヴィング」という概念を作り上げるため、彼らと机を並べじっくり思考を積み上げ、とことん議論する時間を持てたことは、研究者としての私にとって、かけがえのない経験になりました。この期間に、ベルリンと東京で国際シンポジウム『老いと踊り』を開催し、その内容を*The Aging Body in Dance: A cross-cultural perspective*（Co-ed, G. Brandstetter, Routledge, 2017）と『老いと踊り』（共編著外山紀久子、勁草書房、2019年）にまとめています。また、研究成果はこのインターウィーヴィングのシリーズ書籍だけでなく、外部の雑誌“Performance Research”老い特集号の共編著や、雑誌“The Drama review : TDR”での室伏鴻と山伏の身体技法に関する論文としても、まとめました。

Q4. ダンスドラマトゥルクの開拓者としても国際的に活躍なさっていますね。2006年度NYベッシー賞を受賞なさったとのこと。また、アメリカドラマトゥルク協会からは2017 年にエリオット・ヘイズ賞特別賞を受賞されています。本当におめでとうございます。「ダンスドラマトゥルク」についてまだ日本では浸透していないと思います。具体的にどのような活動でしょうか？

ダンスドラマトゥルクは、ダンス研究の知見を、現場の作品づくりに活かしていく役割と、私は理解しています。演劇の場では18世紀からドイツの劇場制度に根付いているものですが、ダンスの分野でのドラマトゥルクは、振付家ピナ・バウシュとドラマトゥルクのライムント・ホーゲの仕事が発端です。これまでの決まった手法で、ダンス作品が作られなくなったとき、ダンスドラマトゥルクという役職が生まれました。作品が一人の作家だけではなく、集団の知で創作されるようになったバウシュや、米国ポストモダンダンスに源流を辿れるようです。

2. 海外の舞踊学関連学会の紹介

ダンスドラマトゥルクは、リサーチを元にした貢献をするのが主流とはいえ、関わり方は現場によって大きく異なります。初演直前の稽古でのフィードバックといったものから、作品に関わるアーティストの選定、作品コンセプトを作ってプロデューサーを見つける時点から関わる場合もあります。舞踊史研究者が復活上演に関わることは、これまでもありましたが、ダンスドラマトゥルクは、創作へのアーティスティックな要素がより求められるのではないかと思います。とはいえ、様々なネットワークを持つダンスドラマトゥルクの参加によって、作品を哲学的言説や社会的関心と繋げて考えるようになり、各国のダンスフェスティバルや劇場ネットワークと繋がりたいという、アーティスト側の期待もあります。アジアでは、ダンスと演劇の要素が作品において混ざっていて、また創作も短期間で、特定集団や師弟関係で行うことが多いので、どのようにダンスドラマトゥルクとして介入していくかは、私も試行錯誤の段階です。

Q5.「ダンスドラマトゥルクは、リサーチを元にした貢献」ですが、共に創作にかかわるアーティスト、アーティストが置かれた社会文化的背景など多様な要素を踏まえながら模索していくものだと理解しました。とても興味深いですね。私自身も現在の所属「明治大学情報コミュニケーション学部」に着任してから、学部の方針「創造&表現」に基づき、研究を踏まえた創作活動も行っています。ダンスドラマトゥルクは大変参考になりそうです。ダンスドラマトゥルクの大枠や詳細を知ることができるウェブサイトなどありますか？英文でも良いです。

ダンスドラマトゥルクの関わりは、ダンス研究にも、多くのことをもたらしていると思います。新作ダンスの上演分析は、外部の研究者には非常に難しいものでしたが、その作品の創作過程に他者として介入することで、作品の記録を残し、創作過程から分析できるようになります。ダンス作品をさらに深化させるだけでなく、ダンスの新たな研究方法として、ダンスドラマトゥルクの役割を考えてもいいかと思います。

今年に入って、このダンスドラマトゥルギーの議論を紹介するウェブサイト（http://www.dancedramaturgy.org）を立ち上げました。これまで現場でのドラマトゥルクの実践が注目されていましたが、ダンスにおいては、動きについてドラマトゥルクが書き残すことは、演劇以上に貴重なものになり得ます。これまで翻訳されていなかったものの、ダンスドラマトゥルクが残す言説が、ダンス研究に示唆を与えることを、伝えられれば嬉しいです。ただ、このウェブサイトを作る過程で、ダンスドラマトゥルクのテキスト選定には苦労しました。欧米では、ドラマトゥルクの実践も言説も蓄積があるものの、アジアではまだ歴史が浅く、ダンスの分野ではまだ始まったばかりです。欧米中心主義や懐古主義を回避しながら、地域やジェンダーの多様性に配慮して、テキストを集めるのは至難の技でしたが、生まれ始めたダンスドラマトゥルクの流れを、エンパワーしていく必要性を、強く感じています。

Q6. アジアにおけるダンスドラマトゥルクの流れを構築していくことが、中島先生のミッション（使命）ですね。最後に日本の舞踊学会に今後期待する点についてお教え願います。

ダンスやパフォーマンス研究で、さまざまな研究手法が始まっていることを受けて、学会において、口頭発表や学術シンポジウム、ポスターセッションに加え、多様な発表形式が行われてもいいのではと考えます。ワークショップ、レクチャー・パフォーマンス、デモンストレーション、書評セッションなど、一つの学会テーマをめぐって多様なアプローチがあると、その地平の広がりが見出せるように思います。また、出版社と連携して、優れた学会発表を、論文集や書籍刊行に繋げていく仕組みがあると、いいのかもしれません。

2. 海外の舞踊学関連学会の紹介

2-2. 国際学会情報（舞踊学・演劇学・パフォーマンス研究）

①台灣舞蹈研究學會（台湾）

林 亞婷（國立臺北藝術大學 Taipei National University of the Arts・台灣舞蹈研究學會監事）
聞き手：富 燦霞（明治大学）

1. 基本情報

学会名（原語）	台灣舞蹈研究學會
英語訳名	【英文名】Taiwan Dance Research Society　【略名】TDRS
学会設立年	2002
事務局（場所）	112 台湾台北市北投區學園路1號 1 Hsueh-yuan Road, Beitou, Taipei 112, TAIWAN
HP	https://sites.google.com/view/tdrs/
趣旨・大会情報等	台灣舞蹈研究學會は、ダンス研究の促進、ダンスの学問分野拡大、実践と理論の相互作用強化、国際的なダンスの学術交流の促進を目的として設立されました。毎年国際学会を開催するとともに、2年ごとに修士・博士課程の学生を対象とした学会も開催しています。台湾の6大学のダンス学科と関連部門の教員グループなどがボランティアとして学会を支え、ダンス研究の推進を支援しています。また、毎年研究論文を公募し、学会誌を出版しています。
ジャーナル	《台灣舞蹈研究》（英文：Taiwan Dance Research Journal）
入会方法	https://sites.google.com/view/tdrs/加入會員?authuser=0をご参照ください。

2. 林さん、インタビューをお引き受けいただき、ありがとうございます。舞踊の実践を中心とするほかの学会とは異なり、TDRSは台湾で初めて実践と研究の両方の重視を掲げた学会として知られています。TDRSが主催されている各種学会の特徴をご紹介ください。

TDRSは来年（2022年）で創立20周年を迎えます。年会では、公募による研究発表・ワークショップ・ダンスパフォーマンスが行われるほか、国際的に高名な専門家を招聘し基調講演をしていただくことも恒例となっています。これまで、アメリカのSusan Foster氏、アルゼンチンのMarta Savigliano氏、イギリスのVida Midgelow氏などの方々にお話しいただきました。

学会成立以来、アメリカのCORD（SDHSとの合併を経て、現DSA）及びイギリスのICKLなど（2004年）や、daCi及びWDA（2012年）といった海外のダンス関連組織と大規模な合同学会・国際学会を台湾で開催してきました。本年も10月23-24日、台南にて「2021 台灣舞蹈研究學會暨國際舞蹈與兒童聯盟臺灣分會聯合研討會（2021 Joint Conference of Taiwan Dance Research Society and daCi TAIWAN）」の開催を予定しています。

このほか、修士論文を対象に毎年「台灣舞蹈研究學會碩士論文菁霖獎（TDRS修士論文菁霖賞）」を選出し、大学院生による台湾のダンス研究を奨励しています。海外のダンス組織との連携関係も積極的に結びます。例えば、私の学会理事長の任期内（2017-18年）には、韓国のSDDHとMOUを締結しました。日本のダンス関連組織やダンスに関わる皆様ともぜひ交流できればと思います。

2. 海外の舞踊学関連学会の紹介

3. TDRSのほかに、台湾にダンス研究関連の学会があればご紹介ください。

私の知る限りダンス研究を中心とする学会はありませんが、研究の内容によって関連すると思われる学会をいくつかご紹介します。

a)劇評人協会(IATC TW) https://www.facebook.com/iatc.taiwan
b)台灣身體文化學會(Taiwan Body Culture Society) https://bodyculture.org.tw/
c)藝術教育研究學會(Arts Education Research Association) https://www.aeratw.org
d)中華戲劇學會(Chinese Taipei Theatre Association) https://www.cttatw.com

4. 最後に、日本の「舞踊学会」に対する期待はありますか。

日本と台湾は国においても、ダンスにおいても歴史的に繋がりがあり、通じるところも多いと思います。今後の協働・交流を大変楽しみにしております。

林さん、ありがとうございました。

2. 海外の舞踊学関連学会の紹介

2-2. 国際学会情報（舞踊学・演劇学・パフォーマンス研究）

②The Natya Kala Conference (India)

竹村嘉晃（国立民族学博物館南アジア研究拠点）

1. 基本情報

学会名（原語）	The Natya Kala Conference 【略名】NKC
日本語訳名	ナーティヤ・カラ（舞台芸術）会議
学会設立年	1981
事務局（場所）	Krishna Gana Sabha, 20, Maharajapuram Santhanam Road, T. Nagar, Chennai – 600017, India
HP	https://www.krishnaganasabha.org/nkc/genesis-and-journey/
趣旨・大会情報等	ナーティヤ・カラ会議は、南インド・チェンナイ市にあるクリシュナ・ガーナ劇場（Krishna Gana Sabha）において、音楽シーズンの12月に毎年開催されるものである。劇場創設者のR・ヤグナラマンによって1981年に立案されたインドの舞踊に関する同会議は、レクチャー・デモンストレーション、研究発表、パネル・ディスカッションのほか、インド国内外の実演家による公演を通じて、インドの多様な古典舞踊を紹介する貴重なプラットフォームとして知られる。実演家はもとより、研究者、批評家、芸能愛好家が国内外から集う同会議は、長年にわたって教育的なインタラクティブと芸術的な創作プロセスを理解・共有するための機会を提供している。
ジャーナル	なし
入会方法	学会組織ではないため、会議に出席する際に参加費を支払うことになる。2019年の第39回会議は5日間の日程で行われ、参加費は500ルピー（2021年10月時のレートで約750円）だった。

2. 当該国際学会に参加して

ナーティヤ・カラ会議は、南インド最大の音楽シーズンに開催されることから、インドの音楽や舞踊に関わる人びとが世界中から参加する。会議は英語が中心だが、一部現地語が含まれることがある。2019年に〈Aneka〉と題して開催された第39回同会議では、シュリディ・チダンバラム博士が企画立案・モデレーターを務め、シンガポールのインド系舞踊団の作品に関する研究発表が行われたほか、“Caste, Gender, Privilege and Their Role in the Bharatanatyam Landscape”と題するパネルディスカッションが行われ、家父長制、カーストや階級、文化的なヒエラルキーの隠れた兆候、舞踊家としてのキャリアの経済的側面、不正に推進された需要と供給など、様々な現状とその課題について議論された。

研究発表は基本的に招聘のため、自ら申し込んで発表機会を得ることは難しいが、インドの舞踊研究に関する動向や国際的なネットワークを構築するよい機会である。またクリシュナ・ガーナ劇場での公演以外にも、複数の劇場で芸能公演が毎日開催（有料／無料）されているため、インドの音楽・舞踊の様々なジャンルを鑑賞することができる。

なお、類似の会議で著名なものには、The Music Academy（同市）によって開催される音楽・舞踊フェスティバルと会議がある（https://musicacademymadras.in/）。

2. 海外の舞踊学関連学会の紹介

2-2. 国際学会情報（舞踊学・演劇学・パフォーマンス研究）

③ A Associação Nacional de Pesquisadores em Dança (Brazil)

神戸周（東京学芸大学）

1. 基本情報

学会名（原語）	A Associação Nacional de Pesquisadores em Dança【略名】ANDA
日本語訳名	全国ダンス研究者学会
学会設立年	2008
事務局（場所）	Escola de Dança da Universidade Federal da Bahia (UFBA), à Av. Ademar de Barros, s/n, Sala 17, Ondina, Salvador/BA, BRASIL
HP	ANDA – Associação Nacional de Pesquisadores em Dança (portalanda.org.br)
趣旨・大会情報等	ブラジルでは全国各地の大学等研究機関に散在するダンス研究者たちが結集する場が長年に渡り存在しなかった。そのような状況を改善しようと、ダンス研究者有志により2008年に設立されたのがこのANDAという組織である。わが国の学会大会に相当するイベントは毎年3日間から4日間に渡って各地の大学を移動しながら開催されている。
ジャーナル	わが国の学会のように、毎年定期刊行物として発行されてはいない。しかしながら、組織設立10年目の2018年に研究テーマ別に11冊の論文集が“E-books”という名称を付され上記ウェブサイト上にpdf.形式で公表されており、閲覧可能である。
入会方法	2021年時点の年会費は現地通貨で145レアル（日本円でおよそ3,000円）であった。また非会員であっても参加料を支払えば上記イベントへの参加は可能である。日本在住のダンス研究者の入会の可否および入会方法について当該組織事務局に電子メールで問い合わせたところ、このようなブラジル国外からの問い合わせは前例がなかったらしく、当該組織の理事会で検討して折り返し結果を連絡する旨の返信があった。

2. 学会大会の現況

前もって設定されたダンスに関するいくつかの今日的な研究テーマの下で、研究発表・講演・討論などの活動が行われている。因みに、COVID-19の流行前に行われた2019年のイベントでは、8つの研究テーマの下に都合239の研究発表が行われており、それぞれの発表内容は上記ウェブサイトよりpdf.形式で閲覧可能である。

2. 海外の舞踊学関連学会の紹介

2-2. 国際学会情報（舞踊学・演劇学・パフォーマンス研究）

④ European Association for Japanese Studies(EAJS)

稲田奈緒美（桜美林大学）

1. 基本情報

学会名（原語）	European Association for Japanese Studies 【略名】EAJS
日本語訳名	ヨーロッパ日本研究協会
学会設立年	1973
事務局（場所）	ベルリン自由大学　東アジア研究センター　日本研究内
HP	www.eajs.eu（2021年10月現在、メンテナンス作業のため閉鎖中。事務局が一時的なページを作成している。https://www.geschkult.fu-berlin.de/e/oas/japanologie/institut/projekte/EAJS/index.html）
趣旨・大会情報等	EAJSは、ヨーロッパ、日本、また世界のすべての国における日本研究への関心を喚起し、研究を促進することを目的として設立された学者・研究者の団体です。ヨーロッパと日本で3年毎に開催される国際会議、シンポジウム、ワークショップを通じて、日本研究における情報やコミュニケーションの流れを促進することを目指しています。2020年にベルギーのゲントで開催される予定であった第16回国際会議は、コロナ禍により2021年8月24－28日にオンラインで開催されました。小熊英二慶應義塾大学教授（歴史社会学）の基調講演「A Reflection on the History of Racial and Ethnic Identities in Japan」で始まり、「都市・地域・環境研究」「言語・言語学」「現代文学」「政治・国際関係」など13のセクションに分かれて実施されました。「Performing Arts」セクションでは様々な舞台芸術、映画、音楽等の発表が行われ、舞踊学関連の発表もここで行われました。
ジャーナル	なし
入会方法	申込書をサイトからダウンロードし、プリントアウトしたものに署名して事務局まで郵送またはファックスで送ります。メールの添付ファイルでは申し込めません。会員資格は3年間有効で、1年間の会員資格はありません。3年間の会費は、機関会員180ユーロ、個人会員 90ユーロ、学生45ユーロです。

2. 当該国際学会に参加して

今回初めて参加しましたが、IFTR（国際演劇学会）等で知己を得た国内外の舞踊、演劇研究者らも多数参加しており、コロナ禍を経た再会を喜び、交流を深めることができました。日本を研究対象とする多くの領域が集うため、普段接することのない研究テーマを知り、知見を広げる貴重な機会となりました。WhovaというZOOMと連動するアプリを用いて大会は運営されましたが、日本からヨーロッパ、米国まで時差が大きく、参加者もスタッフも時間調整が容易ではありませんでした。プログラムはすべて録画、公開することがデフォルトになっており、運営事務局の配慮が感じられました。

3. 私にとっての在外研究

3-1.日本財団アジア・フェローシップの助成

トラディショナルとコンテンポラリーのあいだ

岩澤 孝子（北海道教育大学）

1. 基本情報

渡航先(都市・国名)	バンコク・タイ王国
研究機関	チュラロンコン大学アジア研究所
在外期間	2007年8月～2008年7月
目的	現代タイ、ダンスアーティストによる伝統と創造への挑戦
研究プログラム	日本財団アジア・フェローシップ（APIフェローシップ） （現在廃止）

2. 在外研究を終えて

2-1. APIフェローシップ

2007年8月から1年間、日本財団アジア・フェローシップ（APIフェローシップ）の助成を受けて、タイで伝統文化を背景にもつパフォーマンスの現代的展開について研究する機会を得ました。「APIフェローシップ」（2015年終了）は、東南アジア諸国（タイ、インドネシア、マレーシア、フィリピン。のちにカンボジア、ラオス、ベトナムが追加）および日本出身の学術研究者だけでなく、ジャーナリスト、芸術家、NGO/NPO関係者など、幅広い分野で活躍している人たちを対象に、近隣の国において行う様々な研究や交流活動を支援する事業です。助成金受給者個々の活動が支援されるだけではなく、Asian Public Intellectuals（アジアの公的知識人）の交流と協働を含むフォローアップ・プログラムも充実していました。私は、助成期間終了後に、東南アジアを中心に多様な分野で活躍する魅力的な人材（APIフェロー）とともに、「リージョナル・プロジェクト」と呼ばれる国際的な協働プロジェクトへ参加しています。その活動の一環として、タイの青少年団体と協働してコミュニティと災害をモチーフとした作品を制作・監督する役割を担えたことは、私にとって大きな財産となりました。また、私の滞在国タイでは、APIの地域パートナー機関であったチュラロンコン大学アジア研究所（Institute of Asian Studies, Chulalongkorn University）が受け入れ機関となって、そのきめ細やかなサポートのおかげで安全で快適な研究生活を送ることができたことを今も感謝しています。

2-2. 現代を生きる伝統

調査地では、現代タイのパフォーマンス業界における伝統と創造をテーマに調査を実施したのですが、そのテーマは大きく3つの観点―①伝統舞踊教育機関におけるコンテンポラリーダンスの導入、②現代パフォーマンス分野（演劇・舞踊ジャンル）で活躍するアーティストとアート・フェスティバル、③コミュニティアート―にわかれます。①では、タイ伝統芸能教育の中心的存在である国立演劇舞踊学校およびパタナーシン芸術大学での参与観察を実施し、中等・高等専門教育機関における伝統と創作の共存について調査しました。国立演劇舞踊学校（バンコク校）は、短期でしたが私が初めてタイ舞踊を学んだ思い出深い場所でもあります。かつては王族が暮らしたというワン・ナーの跡地にあるこの学校は、仏像を安置するウボーソットを囲むように校舎が立ち並び、小さくも風格を感じさせる空間でした。ところが、調査期間中にバンコク近郊への校舎移転が行われ、歴史ある学舎の変革期に遭遇した時は残念に感じたものです。

3. 私にとっての在外研究

①の研究成果については、『舞踊學』(第35号)に論文が掲載されていますので、詳細は論文をご覧ください。②は、現代的パフォーマンスを生み出すアーティストたちへのインタビューと同時に、アーティストのネットワーク形成に貢献した二つのアート・フェスティバル―バンコク・フリンジ・フェスティバルとバンコク・シアター・フェスティバル―について調査しました。当時のタイでは、身体表現系のコンテンポラリー・アーティストが西洋モダニズムの様式的影響をあまり受けておらず、自文化発展の延長線上にコンテンポラリー作品を生み出す傾向が見られました。また、②では数多くの魅力的なアーティストとの出会いがあり、初対面の人から興味深い話を聞き出すインタビュー・テクニックを鍛えることができました。最後の③は、当時、バンコク・シアター・フェスティバルの運営で中心的な役割を担っていた現代演劇集団、マカンポン財団との出会いから着想したテーマです。主に社会的包摂の観点からアートが現代社会の諸問題に寄与するコミュニティアートについて近年は日本でもよく知られるようになりましたが、タイ国内でそのパイオニアともいうべきマカンポンがタイ北部で展開するプロジェクトは、調査当時の私にとっては新鮮で刺激に満ちた実践でしたし、ここにも伝統と創造の問題が存在しました。特に彼らがセルフファンディングを目的に年に1回行っていたファシリテーター養成プログラム(主に海外からの参加者を対象)に参加したことで、コミュニティとパフォーマンスの現代的な連関について考え、行動する力を身につけることができたと感じています。

大学の学部時代からタイの「伝統」芸能を研究対象としてきた私は、伝統文化を大事に「守る」ことに気を取られすぎていたせいか、以前はそのダイナミズムを強く意識することがなかったように思います。しかし、この頃から「伝統は変化と生成という同時代性との葛藤を乗り越え、共存する道を模索するからこそ生き続けるのだ」と、伝統のコンテンポラリーな側面に目を向けるようになっていました。そんな当たり前のことを…と笑われてしまうかもしれませんが、素朴な疑問や一見当たり前すぎる事柄の前で立ち止まることができるかどうかは研究者にとって重要な選択の瞬間です。伝統が如何に生き続けるかという問いに向き合う過程でさまざまな出会いに恵まれたこの在外研究は、その後の私の研究領域を広げ、新たな方向に導いてくれた貴重な時間でした。

**バンコク・シアター・フェスティバルの一企画「シンラパートーン賞受賞者によるトーク」。
左から2～4番目:プラディット・プラーサートーン(第1回受賞者)、ニミット・ピピッタクン(第4回受賞者)、ピチェ・クランチュン(第3回受賞者)。現代タイのパフォーマンスシーンを牽引し、国内外での影響力も持つ3名のアーティストが一堂に会した貴重な一枚。**

2007年11月4日(筆者撮影)

3. 私にとっての在外研究

3-2. 海外研修報告

ピナ・バウシュとヴッパタール大学

貫成人（専修大学）

1. 基本情報

渡航先(都市・国名)	ヴッパタール、ベルリン・ドイツ連邦共和国
研究機関	ヴッパタール大学（Bergische Universität Wuppertal）、ヒルデスハイム大学
在外期間	1986/87年, 1996/97年, 2014/15年
目的	フッサールの現象学に関する研究
研究プログラム	ドイツ学術交流会（DAAD），フンボルト財団奨励金，専修大学在外研究助成

2. 在外研究を終えて

在外研究としては、1986/87年にドイツ学術交流会（DAAD）、1996/97年にフンボルト財団奨励金により、いずれもヴッパタール（Wuppertal）大学に、2014/15年には本務校である専修大学の在外研究助成によってベルリンにそれぞれ一年ずつ滞在しました。

とはいえ、この欄に登場する他の方々とは異なって、在外研究の正式な目的、もしくは受け入れ先は残念ながら舞踊研究でも、舞踊学科でもありませんでした。私はもともと文学部哲学科の学部大学院で学び、哲学、それもフッサールの現象学を研究テーマとしていました。ヴッパタールを留学先として選んだのも、当地の大学に、現象学的時間論の世界的権威であるクラウス・ヘルト（Klaus Held）教授がいらっしゃったからにほかなりません。ヘルト先生のご指導の下、87年にはドイツ語、97年には英語で書いた現象学研究論文はいずれも論文集やアメリカの雑誌に掲載されました。

にもかかわらず、舞踊学会ニュースレターのこの欄に拙稿を掲載させて頂くのは、このドイツ滞在経験、とりわけ一回目の滞在が文字通り、わたしの人生を変え、ダンス並びに舞踊研究へと大きく舵を切るきっかけとなったからです。

ヴッパタールと言えば、今でこそ、とりわけ舞踊関係者には知れ渡った名前です。しかし、86年当時、日本国内はおろか、ドイツ以外のヨーロッパ諸国でも、まったく無名の都市でした。「ヴッパタールに留学する」と言うと、カンボジアかインドにでも行くのかと聞かれたくらいです（「ボロヴドール」とかに似ているからでした）。同じ留学生仲間が、ミュンヘンやベルリンなど大都市に滞在するのが心底、羨ましかったのを忘れられません。

ヴッパタール到着直後、偶然、ピナ・バウシュ作品公演を訪れました。ヴッパタール市は1986年当時、人口20万（現在は17万）、名所や名勝はなきに等しく、住民たちみずから、「町の誇り（Stolz）はエンゲルス、モノレール、ピナ・バウシュだけだ」というくらいでした。マルクスの盟友、フリードリヒ・エンゲルスはこの町の富裕な織物商の息子として生まれてその生家は博物館になっており、また、ヨーロッパ最初のモノレールが作られたのもこの街だったからです。いずれもたいしたことのない名物の三つ目がピナでした。ですから、たいした期待もできません。そもそも、それまでわたしは、演劇やオペラ、オーケストラにお金を払ったことはあっても、舞踊を見ることはまったくありませんでした。劇場を訪れたのはまさに「ひやかし」です。1986年9月、作品は《ヴィクトール》（1986年5月 初演）でした。

3. 私にとっての在外研究

ところが、作品が始まって数秒後、まさに雷にうたれたような衝撃に襲われました。この作品は、三方を天上まで届く砂の山に囲まれた舞台で進みます。冒頭、上手奥からいかにもヨーロッパ風の美女が赤い袖なしのワンピースドレスで歩いてくるのですが、その彼女の肩の先にはあるべきはずの腕がありません。そのまま彼女は観客を睥睨し、立ち去ります。そのシーンの、不可解でありながらも観客の想像力を無限に刺激するインパクト。また、その後、小気味よく切り替わるシーン展開、魅力的な人々、思わず笑ってしまうシーンの連続、最後に襲ってくる巨大な目眩。・・・震えるようにしながら三時間近い作品を凝視しながら、私は、その場で、ピナ・バウシュのこの作品を言語化することこそが、これから自分が生きていく上での目的であり、それ以外に自分の生きる意味はない、と決意したのでした。

ヴッパタール舞踊団は毎シーズン、新作を一つ作り、9本のレパートリーとあわせて10作品を市内のオペラハウスと劇場で上演し、それ以外に海外ツアーをするのが習いでした。86/87シーズンは、こうして10作品を全公演見ることができたほか、シーズン終幕の6月から7月に最初のピナ・バウシュフェスティバルが行われ、同じ作品を繰り返し見ることができました。日本からも多くのピナファンが来訪し、そのなかには尼ヶ崎彬氏や外山紀久子氏もいらっしゃいました。

帰国半年後、さいわい常勤職を得ることができ、その間、哲学研究の傍ら、舞踊に関する論文や公演評(『ダンスマガジン』)を執筆するなど、舞踊との縁も深まっていきました。

96/97年、二度目のヴッパタール滞在においては、哲学研究よりもダンスに比重があったかもしれません。計画的に、ヴッパタール舞踊団だけでなく、ドイツ各地の舞踊団を見て回り、また、舞踊学関係者の知り合いもできました。当時、知り合ったのがGabriella Brandshtetterさんや、当時、ベルン国際舞踊祭(Berner Tanztage)のディレクター、現在、スイスの文化参事のClaudia Rosinyさん、また現在ヒルデスハイム大学教授のRolf Elberfeod氏などです。おかげで、97年9月、バイロイト大学での比較文化シンポジウムをはじめ、2003年ドイツ舞踊学会(Gesellschaft für Tanzforschung)など、いくつかの舞踊学関係の学会やシンポジウムで発表させていただいたり、論文を寄稿させていただいたりすることもできました。

2014/15年は、エルバーフェルト教授を受け入れ先に、ベルリンとヒルデスハイムを往復し、ここでもいくつか英独語のレクチャーをさせていただきました。

舞踊学に関してはほとんど在野の研究者のようなものですが、いくつかの幸運に恵まれれば、アカデミックなネットワークの末席を汚すこともできるという事例の報告でした。

ヴッパタール市立オペラハウス

ピナと大野一雄　1997年

4. 委員会より

4-1. 学会誌編集委員会：森立子

『舞踊學』には、会員の皆様の著作情報が掲載されます（単著、共著、翻訳。ただし舞踊学関連書で、本人から報告のあったもの一人5点以内に限る）。
ご著書を出版されました際には、学会誌編集委員会宛てに随時メールにてお知らせください。
学会誌編集委員会のメールアドレスはbuyogaku.editorial@gmail.comです。

4-2. 2021年度学会大会･･･遠藤保子･塚本順子

「2021（令和3年）年度　第73回舞踊学会大会」は2021年12月4日（土）にオンラインで開催いたします。詳細につきましては学会HP及びニューズレターの第73回舞踊学会大会のご案内をご覧ください。

4-3. 例会企画運営委員会･･･八木ありさ

舞踊学会第25回定例研究会の開催中止
前年度の不開催を受け、2021年6月に改めて第25回定例研究会を開催できるかの可能性を検討しましたが諸条件が整わず、開催中止が決定されました。来年度以降の開催時期や開催方法について、引き続き情報収集しつつ検討を続けています。

4-4. 研究奨励賞選考委員会･･･柴眞理子

HPの研究奨励賞の項目に、「研究奨励賞」選考規定、及び「研究奨励賞」推薦のお願いと推薦書を掲載してあります。これらをお読みいただき、該当する論文、著書について会員の皆様に積極的なご推薦をお願いいたします。推薦書は2022(令和4)年 3月末日までにお送り下さい。

4-5. HP管理委員会･･･杉山千鶴

お知らせ

ただいま舞踊学会HPのサーバ移行の作業を行っております。現段階では新旧双方のサーバを併用しておりますが、後日、新サーバのみに切り替わります。皆さまにはその都度、HP、メールを通じてお知らせ致します。

お願い

1. 最近、舞踊学会メーリングリストから大学アドレスにメールが配信されない事例が発生しています。お手元にメールの配信されていない方は、お手数ですが大学以外のアドレスかGoogleメールを新たに取得していただき、そのアドレスを下記（事務局アドレス）までご連絡いただけますよう、お願い申し上げます。
danceresearch.info@kagoya.net
また、随時HPをご覧くださいませ。
2. シンポジウムやワークショップ、研究会、展示の開催や、研究助成金の募集などの学術的な情報を、以下のアドレスまでお寄せください。会員の皆さまと共有致します。
情報は以下のアドレスまでお送りください。
jouhou-dance-hp@kir.jp（舞踊学会HP管理委員会）
皆さまからの情報をお待ちしております。
※ML配信やHP掲載の手続きに時間を要するため、余裕をもってご連絡ください。

4. 委員会より

4-6. 学術連合委員

日本スポーツ体育健康科学学術連合･･･杉山千鶴

2021年度総会が6月14日～7月5日に書面表決により開催されました。出席団体数により総会は成立し、全審議事項が可決されました。

2020･2021年度（令和二･三年度）藝術学関連学会連合活動報告･･･貫成人

1. 2020年11月28日（土）、ZOOMによって委員会を行った。2020年度は、会長の改選年度であり、審議の結果、前会長の大阪大学名誉教授藤田治彦氏（意匠学会）が引き続き会長の二期目を務めることが決まり、副会長には貫が二期目を指名された。また、延長されていた第15回公開シンポジウムは、2021年（令和三年）6月12日（土）にオンラインで行うことが決定された。
2. 2021年（令和三年）6月12日（土）、午前中にZOOMによって令和三年度第一回委員会が行われ、⑴事務局長の交代、⑵2022年度の第16回シンポジウムの開催要領などについて審議が行われた。
3. 同日午後、延期されていた第15回公開シンポジウム「芸術とスポーツ」がZOOMによって行われた。舞踊学会推薦の平山素子氏（筑波大学）をはじめ5名のパネリストによる発表をもとに、のべ200名余の参加者とともに熱心な討論が行われた。
4. 2021年（令和三年）11月21日午後2時より、令和三年度第二回委員会が開催され、第16回公開シンポジウムの詳細などが審議される予定である。

4-7. ニューズレター委員会･･･波照間永子

17号(2019年）より、情報発信を主な目的とするニューズレターに方針を定め、年一回、学会大会の1ケ月前に発行してまいりました。この19号をもって現ニューズレター委員の任期を終了します。ご執筆いただきました先生方に感謝申し上げます。
皆様、3年間本当にありがとうございました。

5. 書籍紹介

『阿波の遊行：檜瑛司民俗芸能写真集』

（久保田麻琴監修, 河出書房新社, 2020）, 付属CD『阿波の遊行』

小林敦子（舞踊学会ニューズレター委員, 明治大学）

本書は、徳島県を中心に民謡および民俗芸能の調査に長年従事した檜瑛司（1923-1996）の写真集である。主に1973年前後の神代踊りや鉦踊りなどが収載され、付属のCDには、1970年代末に檜監修で発売された『正調 阿波の民謡』（ビクター）から抜粋された20曲が収められており、いずれも貴重な資料である。

写真からは、振袖に華やかな造り物の笠を冠り、山道を練り歩く人々のさんざめきや、歌い踊り鉦を叩く人の身体の動きや息遣いが感じられ、檜がいかに民謡や民俗芸能と人々を慈しんでいたかがわかる。

檜と共に郷土芸能調査に従事した皆川学氏（元NHK徳島放送局ディレクター）が、「（檜氏は）舞踊家の本能として、踊り手の身体的パフォーマンスの頂点に合わせて一瞬でシャッターを押すことができる」という文を本書に寄せている。

檜　瑛司 写真
久保田　麻琴 監修
皆川　学 解説
原田　是宏 写真
西田　茂雄 写真
岡本　羊五 写真

単行本 B5　128ページ
ISBN：978-4-309-92207-2

河出書房新社　ホームページより
https://www.kawade.co.jp/np/isbn/9784309922072/
（2021年9月19日アクセス）

6. 事務局だより

その1. 年会費納入のお願い
今年度から郵便払込だけでなく、銀行振込も受け付けております。
★郵便払込取扱票
口座記号番号：00960-5-154553
加入者名：舞踊学会
★銀行振込
ゆうちょ銀行
店番：068
口座番号：普通 1701147
★年会費：7000円

その2. 登録情報変更申請のお願い
住所、勤務先等に変更のある方は、学会HPの「各種事務手続き」から「会員情報の変更申請（会員限定）」のページにて変更後の情報をお寄せ下さい。
もしくは、事務局までメールでご連絡下さい。
HP：http://www.danceresearch.ac/jimu.htm
事務局メール：danceresearch.info@kagoya.net

舞踊学会事務局　寺山由美

編集後記・奥付

・ご寄稿くださいました先生方に心よりお礼申し上げます。中島先生には、ダンスドラマトゥルクの国際的な活動をお話しいただきました。また、富先生（ゲストの林先生）、竹村先生、神戸先生からは、普段なかなか触れることのない台湾・インド・ブラジルの舞踊学関連学会や会議の動向を得ることができました。稲田先生には8月にオンラインで開催された「ヨーロッパ日本研究協会」の近況をお伝えいただきました。さらに、貫先生(ドイツ)と岩澤先生(タイ)の在外研究報告からは、両先生がその後の研究テーマを決定する重要な出会いがあったことを窺い知ることができました。本当にありがとうございます。（波照間・安達）

・3年間、新生ニューズレターにご協力いただいた先生方に改めてお礼申し上げます。この間特に自分がポンコツなために、委員長の波照間先生以下、皆様にご迷惑をおかけするばかりでした。このチームでご一緒できて幸せでした！（外山）

・委員会の先生方の企画力と実務力に頼るばかりの3年間でしたがとても勉強になり、また在外研究については、わくわくしながら原稿を読ませて頂きました。ニューズレター作成に関わった先生方とお読み頂いている先生方に感謝申し上げます。（小林）

・お忙しい中、ご寄稿くださいました先生方に感謝申し上げます。原稿を読み、国内外の多くの舞踊研究者とのつながりを改めて感じました。コロナ禍が一段落した暁には、ぜひこうした文脈を生かし、各国の研究者と交流の機会を持てることを期待したいと思います。（宮川）

3年間、外山先生にご助言・監修いただき、宮川先生、安達先生、小林先生とチームを組んで、新ニューズレターの編集にかかわることができました。チームのメンバーのサポートに心より感謝申し上げます。（波照間）

ニューズレター第19号
発行者：舞踊学会（会長：猪崎弥生）
発行日：2021年11月5日
編集（姓の五十音順）：
安達詩穂　小林敦子　外山紀久子
波照間永子　宮川麻理子

ご意見、ご感想、掲示板への投稿希望は以下のアドレスまでお願いいたします。

ニューズレター委員会
danceresearch.newsletter@kagoya.net